案頭の書

芥川龍之介

一　古今実物語

一

大阪の画工北瑃（ほくせん）の著はせる古今実物語（ここんじつものがたり）と云ふ書あり。前後四巻、作者の筆に成れる挿画（さしゑ）を交（まじ）ふ。格別稀覯書（きかうしよ）にはあらざれども、聊（いささ）か風変（ふうがは）りの趣（おもむき）あれば、そのあらましを紹介すべし。

古今実物語は奇談二十一篇を収む。その又奇談は怪談めきたれども、実は少しも怪談ならず。たとへば「幽霊二月堂の牛王をおそるる事」を見よ。

「今西村に兵右衛門と云へる有徳なる百姓ありけるが、かの家にめし使ふ女、みめかたち人にすぐれ、心ざまもやさしかりければ、主の兵右衛門おりおり忍びかよひける。此主が女房、妬ふかき者なるが、此事をもれ聞きて瞋恚のほむらに胸をこがし、奴をひそかにまねき、『かの女を殺すべし、よく仕了せなば金銀あまたとらすべし』と云ひければ、この男も驚きしが、元来慾心ふかき者なれば、心安く受合ひける。(中略)

下女（中略）何心なくあぜづたひに行く向うの方、すすきのかげより思ひがけなく、下男横だきにして池中へなげ入れける。（中略）

「日も西山にかたむき、折ふししよぼ〳〵雨のふるをいとはず、夜歩きをたのしみにうでこきする男、曾我宮へ日参。此所を通りけるに、池の中より『もしもし』と呼びかくる。誰ならんと立ちどまれば、いぜんの女池の中よりによつと出で、『男と見かけ頼み申し度き事あり』と云はせもはてず、狐狸のしわざか、人にこそより目にもの見せんと腕まくりして立ちかかれば、『いやいややさやうの者にあらず。我は今西村の

兵右衛門（へいゑもん）に奉公致すものなるが、しかじかのことにてむなしく成る。あまりになさけなきしかたゆへ、怨（うら）みをなさんと一念此身をはなれず今宵（こよひ）かの家にゆかんと思へど主（あるじ）つねづね観音を信じ、門戸（もんこ）に二月堂（にぐわつだう）の牛王（ごわう）を押し置きけるゆゑ、死霊（しりやう）の近づくことかなはず（中略）牛王をとりのけたまはらば、生々世々（しやうじやうせぜ）御恩（ごおん）』と、世にくるしげにたのみける。

「かのもの不敵（ふてき）のものなれば（中略）そのところををしへたまへ。のぞみをかなへまゐらせんと、あとにつきていそぎゆく。ほどなく兵右衛門が宅になれば、女の指図（さしづ）にまかせ、何かはしらず守り札ひきまくり捨て

ければ、女はよろこび戸をひらき、家へ入るよと見えしが臥（ふ）してゐたる女房ののどにくひつき、難なくいのちをとりて、おもてをさして逃げ出でける。（中略）「女走りいでゝ（中略）此上ながらとてものことにいづくへなりと連れてゆきたまはれと、背につきはなれぬうち、家内（かない）にわかにさわぎ立ち、やれ何者のしわざなるぞ、提灯（ちやうちん）松明（たいまつ）と、上を下へとかへすにぞ、以前の男も心ならず足にまかせて逃げゆきしが、思はずもわが家にかへり、（中略）ひとり住みの身なれば、誰れとがむるものもなけれど、幽霊を連れかへりそゞろに気味わるく、『のふ〳〵のぞみはかなひし上は、いづかた

へもゆきたまへ、（中略）』と、心のうちに念仏をとなへけるこそをかしけれ。

「幽霊もしばしはさしうつむきてゐたりしが、（中略）怨（うら）めしと思ふかたきをかみころし、一念散ずるときは泉下（めいど）へもゆくべきに、いまだ此土（このど）にとどまることのふしんさよと心をつけて見るに、さして常にかはることもなし。（中略）それより一つ二つとはなし合ふに、いよ〳〵幽霊にあらざるにきはまりける。（中略）男も定まる妻もなければと、つひ談合（だんがふ）なりてそこを立ちのき、大阪にしるべありてひきこしける。兵右衛門（へいゑもん）がかたにはかゝることゝは露しらず、本妻と下女（げぢよ）が修羅（しゆら）の

苦患(くげん)をたすけんと御出家(ごしゆつけ)がたの金儲(かねまう)けとなりけるとなり。」

この話は珍しき話にあらず。鈴木正三(すずきしやうざう)の同一の怪談を発見し得べし。唯北瑢(ほくせん)はこの話に現実主義的なる解釈を加へ、超自然を自然に翻訳(ほんやく)したり。そはこの話に止(とど)まらず、安珍清姫(あんちんきよひめ)の話を翻訳したる「紀州日高(きしうひだか)の女山伏(やまぶし)を殺す事」も然り、葛(くず)の葉(は)の話を翻訳したる、「畜類人と契(ちぎ)り男子(をのこ)を生む事」も然り。鉄輪(かなわ)の話を翻訳したる「妬女貴布禰明神(とぢよきぶねみやうじん)に祈る事」も然り。殊に最後の一篇は嫉妬の鬼(おに)にならんと欲せる女、「こは有(あり)がたきおつげかな。わが願成就(ぐわんじやうじゆ)とよろこび、其まま川へと

び入りける」も、「ころしも霜月下旬の事なれば、（中略）四方は白たへの雪にうづみ、川風はげしくして、身体氷にとぢければ、手足もこごへ、すでに息絶へんとせし時、」いつしか妬心を忘れしと云ふ、誰かこの残酷なる現実主義者の 諧謔 に失笑一番せざるものあらん。

二

更に又「孝子黄金（こがね）の釜を掘り出し娘の事」を見よ。

「三八（さんぱち）といへる百姓は一人（ひとり）の母につかへて、至孝ならぶものなかりける。或年（あるとし）の霜月（しもつき）下旬の頃、母筍（たけのこ）を食（しょく）し度由（たきよし）のぞみける。もとより貧しき身なれども、母の好みにまかせ、朝夕（あさゆふ）の食事をととのへすすむといへ共この筍（たけのこ）はこまりはてけるが、（中略）蓑笠（みのかさ）ひきかづき、二三丁ほど有所（あるところ）の、藪を心当（こころあて）に行（ゆき）ける。積る朽葉（くちば）につもる雪、かきのけ〱さがせども、（中略）ああ天我をほろぼすかと泪（なみだ）と雪に袖（そで）をぬらし、是非（ぜひ）なく〱も帰る道筋、縄（なは）からげの小桶（こをけ）壱（ひと）つ、何ならんと取上げ見れば、孝子三八に賜（たまは）ると書付はなけれ共、ま

づ蓋(ふた)をひらけば、内よりによつと塩竹の子、金(かね)もらうたよりうれしく、（中略）女房にかくとしらすれば、同じ心の姑(しうとめ)思ひ、手ばやに塩だし鰹(かつを)かき、即時に羹(あつもの)となしてあたへける。其味生(なま)なるにかはる事なく、母もよろこび大方(おほかた)ならず、いか成(なる)人のここに落せしや、是又壱(ひと)つのふしぎ也。

「しかるにかほど孝心厚き者なれ共、拵(かせ)げばかせぐほど貧しく成り、次第〳〵に家をとろへ、今は朝夕(あさゆふ)のけぶりさへたえ〳〵に成りければ、三八(さんぱち)女房に云ふやう、（中略）ふたりが中にまうけし娘ことし十五まで育てぬれ共、（中略）かれを都の方(かた)へつれ行き、勤奉公(つとめぼうこう)と

やらんをさせ、給銀(きふぎん)にて一挊(ひとかせぎ)して見んと思ふはいかにと尋ぬるにぞ、わらはも疾(と)くよりさやうには思ひ候(さふら)へ共、（中略）と答へける。（中略）三八は身ごしらへして、娘うちつれ出でにける。名にしおふ難波(なには)の大湊(おほみなと)、先(まづ)此所(ここ)へと心ざし、少しのしるべをたずね、それより茶屋奉公にいだしける。（中略）扨(さて)此娘、（中略）つとめに出(いづ)る其日より、富豪の大臣かかり、早速(さそく)に身うけして、三八夫婦母おやも大阪へ引きとり、有りしにかはる暮(くらし)と成り、三八夏は蚊帳(かや)の代りにせし身を腰元(こしもと)共に床(とこ)を扇(あふ)がせ、女房は又姑(しうとめ)にあたへし乳房(ちぶさ)を虎屋(とらや)が羊羹(やうかん)にしかへ、氷から鯉(こひ)も古めかしと、水晶の

水舟（みづぶね）に朝鮮金魚を泳がせて楽しみ、是（これ）至孝のいたす所なり。」

天は孝子に幸福を与へず。孝子に幸福を与へしものは何人（なんびと）かの遺失せる塩竹の子のみ。或は身を売れる一人（ひとり）娘のみ。作者の俗言を冷笑するも亦悪辣（またあくらつ）を極（きは）めたりと云ふべし。予（よ）はこの皮肉なる現実主義に多少の同情を有するものなり。唯唯作者の論理的頭脳（づなう）は残念にも余り雋鋭（しゆんえい）ならず。「餓鬼聖霊会（がきしやうりやうゑ）を論ずる事」の如き、「寺僧病人問答の事」の如き、或は又「仏者と儒者渡唐天神（とたうてんじん）を論ずる事」の如き、論理の筆を弄（ろう）したるものは如何（いか）に贔屓眼（ひいきめ）に見るにせよ、概（おほむ）ね床屋（とこや）の親方の

人生観を講釈すると五十歩百歩の間(かん)にあるが如し。因(ちなみ)に云ふ。「古今(ここん)実物語」は宝暦(はうれき)二年正月出板、土問然(とけいぜん)の漢文の序あり。書肆(しよし)は大阪南本町一丁目村井喜太郎(むらゐきたらう)、「古今百物語」、「当世百物語」号と同年の出版なりしも一興ならん乎(か)。

二　魂胆色遊懐男

「魂胆色遊懐男(こんたんいろあそびふところをとこ)」はかの「豆男江戸見物(まめをとこえどけんぶつ)」のプロ

トタイプなり。予の家に蔵するは巻一、巻四の二冊なれども、大豆右衛門(まめゑもん)の冒険にはラブレエを想はしむるものなきにあらず。

大豆右衛門は洛東山科(らくとうやましな)の人なり。その母「塩の長次(ちやうじ)にはあらねど、夢中に馬を呑むと見て、懐胎したる子なるゆへ」大豆右衛門と称せしと云へば、この名の由(よ)つて来る所は必(かならず)しも多言するを要せざるべし。大豆右衛門、二十三歳の時、「さねかづら取りて京の歴々の女中方へ売べしと逢坂山(あふさかやま)にわけ登り」しが、偶(たまたま)玉貌(ぎよくばう)の仙女(せんぢよ)と逢ひ、一粒(いちりふ)の金丹(きんたん)を服するを得たり。「ありがたくおし頂きてのむに、忽ち其身雪霜の消ゆる如く

みぢみぢとなつて、芥子人形の如くになれり。」こは人倫の交りを不可能ならしむるに似たれども、仙女の説明する所によれば、「色里にても又は町家の歴々の奥がたにても、心のままにあはれるなり。（中略）汝があふて見度と思ふ女のねんごろにする男の懐の中に入れば、その男の魂ぬけ出、汝仮に其男に入れかはりて、相手の女を自由にする事、又なき楽しみにあらずや」と云へば、頗る便利なる転身と云ふべし。爾来大豆右衛門、色を天下に漁すと雖も、迷宮に似たる人生は容易に幸福を与ふるものにあらず。たとへば巻一の「姉の異見耳痛樫木枕」を見よ。

「台所より飛びあがり、奥の方を心がけ、襖のすこし明きたるあひよりそつと下りて大座敷へ出、（中略）唐更紗の暖簾あげて、長四畳の間を過ぎ、一だんたかき小座敷あつて、有明の火明らかに、是ぞ此家の旦那殿の寝所ならめと腰障子をすこしつきやぶりて、是より入つて見れば夫婦枕をならべて、前後も知らず連れ節の鼾に、（中略）先内儀の顔をさし覗いて見れば、其美しさ此器量で三十ばかりに見ゆれば、卅五六でもあるべし。（中略）男は三十一二に見えて、成程強さうな生れつき。扨は此女房の美しいに思ひつきて、我より二つ四つも年のいたをもたれしか、但入り聟か、（中

略）と亭主が懐にはいればそのまま魂入れ替り、（中略）さあ夢さましてもてなしやと云へば、此女房目をさまし、肝のつぶれた顔して、あたりへ我をつきのけ、起きかへつて、コレ気ちがひ、爰を内ぢやと思ひやるか、夜の更けぬ先に往にや〳〵と云ふに、面白うもない歌留多をうつてゐて夜を更かし、今からは往なれまい、旦那殿も大津祭に行かれて留守ぢやほどに、泊つてなりと行きやと、兄弟の忝けなさは何の遠慮もなく一所に寝るを、姉をとらまへ軽忽な、こりや畜生の行儀か。こちや畜生になる事は厭ぢやいの。（中略）多聞悪いと畳を叩いて腹を立てる。扨は南無さん

姉ぢやさうな。是は粗相千万、（中略）と後先揃はぬ事を云ふて、又本の夜着へこそこそはいつて、寝るより早く其処を立ち退き、（下略）」（この項未完）

（大正十三年六月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
２０１０年10月30日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。